

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 言語の「科学」に思うこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/1990">https://repository.ninjal.ac.jp/records/1990</a>

# 言語の「科学」に思うこと

鈴木 孝夫

今から47年前の昭和25年に、私は当時アメリカ言語学のメッカとまで呼ばれたミシガン大学の大学院に留学した。ところが意味論を専攻したいと意気込んでいた私は、入学早々大変なショックを受けることになった。指導教授の Charles Fries 教授から、意味などという客観的科学的に扱うことのできないものは、言語学の対象にはならないから、どうしてもやりたいのならば哲学科か心理学科にでも移りなさいと告げられたからである。

戦争終了直後の日本では、まだアメリカ構造言語学についての知識など無きに等しく、言語学はもっぱらヨーロッパ系の人文的色彩の濃い philology の伝統の中で、教えられ研究されていた。だから私はことばの意味という人間の言語の最も本質的で一番興味ある部分が、アメリカの言語学から排除されているなど、思ってもみなかったのである。

しかし私の驚きはこれに止まらなかった。著名な音声学者の Kenneth Pike 教授の授業に出てみると〈言語の正しい分析は、しかるべき訓練を受けた言語学者が、対象言語の外側から、客観的な手順を踏みながら行うべきものである。したがって言語使用者（その言語を母語とする人）の直観や内省（introspection）を交えた主観的な分析報告など無価値であり、無視すべきである。言語使用者に求められるものは、研究者に必要な言語資料を正確に提供すること、つまり忠実なインフォーマントとしての役割のみである。だからインフォーマントはなまじの知識や先入主のない、無学な素人の方がむしろ望ましい〉といった発言が次々に飛び出してくるのだ。

つまり音声の完全な録音記録が充分にありさえすれば、母語使用者がいなくても言語研究は可能であるという、極端な音声偏重の言語観が支配していたのである。

ところがこのような客観的で行動主義的な音声分析に根拠を置く「科学的」な米国言語学は、その後、僅か10年も経たないうちに、180度のコペルニクス的転換を遂げる。Noam Chomsky の提唱する生成変形文法が登場したのである。すると今度は、あれほど忌み嫌われた母語使用者の直観による内省報告、つまり〈私はこう思う、こう感じる〉という客観的には観察できない意見が、分析の最も重要なより処として認められることになった。そしてこの流れに従う「科学的」な言語学が、時とともに分裂し細分され、今や相互に理解不能な、いくつもの微小専門家集団の百鬼夜行状態を生んでいることは良く知られている。

よく〈科学と宗教は全く別だ、科学が終わる所で宗教は始まる〉などと言われるが、私の見る限り、両者の精神構造は酷似している。どちらもドグマを立て、ドグマの中に閉じこもる。一つのドグマを打ち破ったと思うと、また別のドグマのとりこになる。言語学の歴史をよく見ると、そこには分裂に分裂を重ね、次々と異端を追放し、互いに攻撃することを止めない、キリスト教やイスラーム教、そしてマルクス主義の社会経済学がたどった道と殆ど変わらない流れを発見する。

私は、この『日本語科学』の中に、特定のドグマから解放された自由な、常識的であって科学的な論文、時間の流れに耐える論考が多数掲載されることを心から希望している。